

Face to face

芸術研究科 造形表現専攻
写真・映像領域 博士前期課程
2025年3月修了

王 弈韜

主査 百瀬 俊哉 副査 大日方 欣一 佐藤 慈

研究背景

故郷に戻り、3年以上会っていなかった家族や友人と再会しました。久しぶりに会った友人と話をした際、私は自然と彼の写真を撮りました。改めてその写真を見返すと、その日の雰囲気は鮮明に蘇り、他者との関わりが自分にとって必要不可欠であることを深く感じました。人々とのつながりの重要性を認識したうえで、私は写真を通じて相手との感情的なやり取りを記録し、できる限り正直に向き合いたいと思っています。身近な人々のリアルで自然なポートレートを撮影することで、その瞬間の人々や思いを大切にしたいと考えています。

研究目的

写真は、私にとって他者とコミュニケーションをとる手段であるだけでなく、協働やコミュニティ形成の手段でもあります。そのため、自分の周りの人々にもっと目を向け、話をしてみたいと思うようになりました。彼らのポートレートを撮影し、もし双方が同意すればその写真を保存する。それは私にとって大変意味のあることであり、写真を通じて彼らの顔を記録することで、交流や感情を思い出すきっかけになればと思っています。

研究概要



今回の制作「Face to face」では、撮影場所に特別なこだわりを持たず、特徴が少なく目立たない場所や被写体の自宅、室内などで撮影を行いました。また、被写体は自分と親しい関係にある人々に限定し、彼らと交流しながら撮影を進めました。三脚を使用しカメラを固定し、レリーズを用いて撮影を行う際、被写体に話しかけることで対等でリラックスした雰囲気を作り出すよう心がけました。これにより、被写体が最も自然でリラックスした状態を引き出し、その人ならではの個性や特徴が際立つ写真を撮ることを目指しました。

成果・まとめ

今回の研究を通じて、ポートレート写真に対する理解が深まりました。ポートレート写真は、他者とのコミュニケーションをとり、共に過ごすための重要な道具であり、私にとって大きな意味を持っています。また、人々とのつながりを通して、自分自身に向き合う勇気も得られました。これからも作品制作を続け、写真表現の新たな発見を追求していきたいと考えています。



指導教員コメント

「Face to Face」は、人間関係の深さやつながりの大切さを再確認させる作品です。現代社会において、対面でのコミュニケーションが減少する中、これら作品は、他者と向き合う勇気や、その中で得られる自己発見の重要性を改めて訴えかけています。写真という媒体を通じて、人と人、そして自己との関係性を深く考察したこの作品は、鑑賞者に感情的な共鳴と新しい視点を提示しています。

百瀬 俊哉